

徒然草における教養美の考察 (2)

——文選を中心として——

中 田 正 心

先回、第5巻第1号では無常観、趣味観にふれた。今回は引続づいて、兼好の社会観について叙述する。

(3) 社会観

兼好の社会観は、日常生活において対人関係はどうあるべきか、世に対処するにはどんな態度・姿勢で応ずべきか、などを自由な立場で観取し、自己の趣向に基づいて静かに説かれているのである。それは彼がこよなく人間を愛し、人生に対して執意的であることによるのであろう。

複雑な人間の種々相を凝視して日常生活に幸福を願うのは、一に南北朝の到来を覚える混沌たる社会的背景であり、二には人間の真理の追求に止むことのない過程に生ずる多面的な思考の眼からの、現世主義者として語る諸々である。

ここに採りあげた五つの段をみると、竹林の七賢の二人嵯叔夜・向子期をはじめとして、陶淵明にしても、俗世を好しとしないこれ等古人達の影響が多たである。この点を兼好は現実的社会観を主張する中で、如何に受容しているかを考察していく。

(イ) 心がまえについて

世人は自分に関係のない事ばかりを好んでいるとして、「法師の兵の道、夷は仏法や気色、連歌、管絃を嗜み合って」いる状態を「おろかなる己が道」と批判する。

徒然草における教養美の考察 (2)

法師のみにもあらず、上達部、殿上人、かみざままで、おしなべて、武をこのむ人多かり。百たび戦ひて百たび戦つとも、未だ武勇の名を定め難し。其の故は運に乗じて寇をくたく時、勇者にあらずといふ人なし。兵尽き矢窮まりて遂に敵に降らず、死を易くして後、始めて名をあらはすべき道なり。生けらん程は武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近き振舞、其の家にあらずば、好みて益なきことなり。(第80段)

「兵尽き矢窮まりて遂に敵に降らず」は、『文選』巻21李少卿の「答蘇武書」兵尽矢窮、人無尺鉄。猶復徒首奮呼、争為先登。

に依っている。

天漢2年(前99年)武帝54歳の時、李広利が大將軍として第1回の匈奴討伐遠征に、李少卿は部将となって5,000の軍を率いたが、不運な戦闘の結果に終わってしまった。

友人の司馬子長は李少卿の弁護をして武帝の怒りにふれ、屈辱的な刑罰を受けて『史記』のなったことは、あまりにも有名である。

蘇武は武帝の天漢元年(前100年)、匈奴に使して捕えられていて、降伏した李少卿と友人になった。匈奴王は、あらゆる手段で降服させ仕えさせようと試みたが、その虐待に堪えぬき、ついに北海のほとり無人の地に移され、匈奴にとどまること19年、白髪姿となって漢に帰った。

「与蘇武三首」の第一首は、

良時不再至、離別在須臾。屏營衢路側、執手野踟躕。仰視浮雲馳、奄忽互相踰。風波一失所、各在天一隅。長當從此別。且復立斯須。欲因晨風發、送子以賤軀。再び会えぬかも知れないと思いつつ、その別れの切ない気持を歌う。

「答蘇武書」は、故国の蘇武からの手紙への返信であって、匈奴に降らざるを得なかった苦しい立場の心情をのべている。

匈奴に出征したが、5人の大将が道に迷ったために約束どおり我と出あって一緒になることができず、かくて我の軍だけで敵と遭遇戦をする結果となった。しかも諸々の悪条件をもっていた。その一つは、万里の行軍に必要な兵糧米を、その

徒然草における教養美の考察 (2)

二つは、歩兵をひきいて大砂漠に出て強力な胡の国に入りこむわが軍は、5,000の歩兵で10万の新鋭の敵軍に対して、1人が敵の1,000人に当るという数の上では全く問題にならぬ状態である。死傷は野につもり、生者は100に満たない。しかもかれらは傷病者を世話するので干戈を取られぬ。われが命令一下、傷病者までもみな起きあがる。その勢を見た敵は恐れて奔走する。「兵」武器、刀剣、その兵も矢も全部つかいはたして、身体にはわずか1尺ばかりの鉄すらも持たない。かくて素手で元気をだして、ときのをあげ、われ先にと敵の中に突き進む。この時、わがまごころが人にも天にも通じたのであろうか、わが軍の戦士はために感激の血涙をすすり、天地はためにふるい動き大音響を発した。

匈奴王单干は我を捕えることをあきらめて兵を引こうとしたとき、もと漢人の管敢なるものが、「李陵の軍のほかには漢の伏兵はおらぬから」と教えて、かくて、苦戦の効なく敗るのやむなきに至ったのである。

当此時也、天地為陵震怒、戦士為陵飲血。单干謂陵不可復得。便欲引還。而賊臣教之、遂便復戰、故陵不免耳。

最後に、わが家族をも殺してしまった漢朝は、われの功労を無視するものである。古人の言う「たとい忠誠の心は激烈でないにしても、死ぬことを我が家に帰るごとくに思って少しもおそれず、安んじて、死に就く」われもそれと同じである。

しかし、漢朝はわれを愛顧なさらぬ。かくて、生きて名譽をあげることができない以上は匈奴の地に終始し、この地に屍を葬られるばかりである。身をかがめ、首をさげて皇城にかえり、そして獄吏どものかつて気ままな法文あつかいを受けることなど、決してやらない。どうか君も、わが帰りをもう待たないで下さい。

漢亦負徳。昔人有言、雖忠不烈、祖死如婦。陵誠能安、而主豈復能眷乎。男兒生以不成名、死則葬蛮夷中。誰復能屈身、稽顙、還向北闕、使刀筆之吏、弄其文墨耶。願足下勿復望陵。嗟乎子卿、夫復何言。

帝の命で軍を進めた李少卿の数奇なる運命と、それに対処出来る気概は、漢の李広大将の孫という武道を専らとする家柄に育まれたからなので、貴族には全く別世界であると兼好は言うのである。

徒然草における教養美の考察 (2)

兼好は彼の国の歴史上、宿命的な蒙古草原における戦闘、異民族間の闘争の無惨さを、わが国人はいか程想像し、また理解できるかと問うのである。李少卿を非業のどん底に陥れた民族の末裔元軍との間で戦わされた、文永の役・弘安の役において、幸いそれ程悲劇的な事実はなかった。それだけに、兼好には蒙古合戦の恐怖がさめやらぬうちに、世人が武道のまねごとをするのは言語道断であると言う。わが国史上、この期の前後は絵巻を繰り広げる時代とはいえ、そのような世相にあまりにも無意識・無主体に追随する人達の愚かさがあった。特に公家の相当の身分の人達までが、そのまねごとをする姿に兼好の目は冷たくさすのである。

ようやく軌道にのった封建制度の社会組織は、二度の短い期間とはいえ蒙古襲来によって、絶えず緊張を強い、その余波は数年にわたって暗い影をひいて、矛盾と混迷を堆積させ亀裂を生じた。後醍醐天皇は、鎌倉幕府が末路をたどる頃、歴史の舞台に躍り出た一人であった。

京都では天皇を中心として、貴族社会の復古の運動がおこなわれていた。幕府は密告によって事前に処理して不発に終わった、正中の変、元弘の乱が相継ぎ、洛中が紛争する中で、兼好は『徒然草』を執筆した⁽¹⁾のである。

公家社会の再来を望むにしても、大覚寺・持明院両統の係争という病根は、貴族達が時の権力者に南行北走する悪弊となり、分をわきまえぬ者も多い。

あづまの人の、都の人に交り、都の人のあづまに行きて身を立て、又本寺本山を離れぬる顕密の僧、すべて我が俗にあらずして、人にまじはれる、見苦し。
(第165段)

と、鎌倉に下向を二度もしていても、やはり公家の出身者であり京都の人である。また、

我を知らずして、外を知るといふ理あるべからず。されば、己を知るを物知れる人といふべし。
(第134段)

「己自身を知る」ことの大事を説いているところからも、兼好は時勢に対して抗議するのである。

時代は次のものに向って進展する時に、旧客ともなった貴族社会の再び訪れる

ことを期待するのは、不可解なのである。

あまり遠くない、後鳥羽上皇によって起こされた承久の乱において、しかりではなかったか。社会現実と歴史の理りは、いかに後醍醐天皇といえどもその意図するものは、「御謀叛⁽²⁾」ではないかと兼好はいうのであろう。

(四) 友人について

人間関係については、第12段に「同じ心ならむ人」をあげている。友情についてのべたもう1段は、

友とするにわろき者七つあり。一つには高くやんごとなき人、二つには若き人、三つには病なく身強き人、四つには酒を好む人、五つには武く勇める兵、六つには虚言する人、七つには欲深き人。よき友三つあり。一つには物くるる友、二つにはくすし、三つには知慧ある友。 (第117段)

である。この一文は各注釈書が『論語』の「季氏第十六」の、

孔子曰、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞益矣。友便辟、友善柔、友便佞損矣。を指摘して、「暗示」「示唆」された⁽³⁾という。『論語』に由来する列挙の仕方であり、その内実には自身の体験・生活にもとづく兼好らしさが色濃く含蓄されている⁽⁴⁾と言うが、「内実」として理想とするものは何かを考慮してみると、現実には「同じ心ならむ人」の得ることが出来ないことを諦観し、次の第13段で「見ぬ世の人を友」として楽しみ、思想の糧として生活経験を重ねて、ここに言う個性的な実用性の友情論という経過をみるのである。であれば内実の基調に『文選』巻22嵇叔夜の「与山巨源絶交書」をあげることができよう。少し長文になるが、引用する。

自惟至熟、有必不堪者七、甚不可者二。臥喜晚起、而当関呼之不置。一不堪也。抱琴行吟、戈釣草野、而吏卒守之、不得妄動。二不堪也。危坐一時、痺不得揺。性復多蝨、把搔無已。而当裹以章服、揖拜上官。三不堪也。素不便書、不喜作書。而人間多事、堆案盈机。不相酬答、則犯教傷義。欲自勉強、則不能久。四不堪也。不喜弔喪、而人道以此為重、己為未見恕者、所怨至欲見中傷者。雖瞿

徒然草における教養美の考察 (2)

然自責，然性不可化。欲降心順俗，則詭故不情，亦終不能獲無咎無誉。如此，五不堪也。不喜俗人，而当与之共事。或賓客盈坐，鳴声聒耳，囂塵臭处，千变百伎，在人目前。六不堪也。心不耐煩，而官事鞅掌，機務纏其心，世故繁其慮。七不堪也。又每非湯武，而薄周孔。在人間不止此事，会顯世教所不容。此甚不可一也。剛腸疾惡，輕肆直言，遇事便発。此甚不可二也。以促中小心之性，統此九患。不有外難，当有内病。寧可久処人間邪。又聞道士遺言。

山沢に遊ぶ嵇叔夜には、俗人の礼なるものには全く関与しないところである。彼自身の欠点として、「不堪」は、

- ①朝寝を好むこと。
- ②行吟射釣を好むこと。
- ③正装の衣冠にて正坐することが出来ぬこと。
- ④手紙を書くことが嫌いなこと。
- ⑤性喪を弔うことが嫌いなこと。
- ⑥人前にて狐媚の態度ができぬこと。
- ⑦世事煩苛で私の心を乱すこと。

また、「不可」は

- ①殷の湯王，周の武王をそしり，周の公旦・孔子を軽んずること。
- ②悪を徹底的にくみ，他人の悪事はすぐ摘発すること。

等である。

不堪の点では「高く，やんごとなき人」の世界，「虚言する人」「欲深き人」と一致する。

また、「一つにはくすし」といっているが，嵇叔夜が最後に述べるような，「道士的生活」によって健康の管理を心する点がある。嵇叔夜には別に「養生論」があり，兼好も『徒然草』の他の段に引用している⁽⁵⁾。

実用的「友情論」とはいても，一般的でなく，それは沙弥として現実社会に直接関係しない，自由な身の兼好には，人間関係において圧迫感を感じるものを極度にきらう⁽⁶⁾点で，古の友である嵇叔夜の言う不堪と不可は理解出来るのである。

(イ) 教養について

第1段において「ありたき事は」として、本格的な経学、漢詩賦を作る事、和歌、管絃、有職等広範囲に列挙しているが、ここでは前節で、人間にとって必要な最小限度の実用的才智・技芸として、経書の学問、書道、医術、弓射、乗馬、料理、手細工などをあげる。その各々は「聖の教を知れるも第一」とし、「学問に便あらんため」であり、「身を養ひ人を助け、忠孝のつとめ」であり、礼・楽・射・御・書・数の「六芸に出だせり」であり、『帝範』務農第16に言う「食は人の天なり」と、現実的・実用的に言う。

此の外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌は巧に、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むる事、漸うおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鉄の益多きにしかざるが如し。

(第122段)

「多能は君子の恥づる所」は『論語』の「子罕第九」

大宰問於子貢曰「夫子聖者与、何其多能也。」子貢曰「固天縱之將聖。又多能也。」子聞之曰「大宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。」を引ぎ、次に、詩歌によって世の中の政治をすることは、次第に愚かに近くなると、喝破する。

「詩歌に巧に、絲竹に妙なるは、幽玄の道」は、『文選』巻8の向子期「思旧賦竝序」の、

嵇博綜技芸，於絲竹特妙。臨当就命顧視日影，索琴而彈之。

に依っている。

竹林の七賢の一人である向子期が、かつて今は亡き嵇叔夜、呂安兩人と一緒に暮らした旧廬を訪れて、懐の情に堪えず馬を留めて筆を授りて心を写すのであった。嵇叔夜が芸道に秀でていたことは、『文選』巻9の「琴賦竝序」に、余少好音声，長而翫之。以為物有盛衰，而此無變。滋養有厭，而此不勸。可以道養神氣宣清去，処窮而不悶者，莫近於音声也。是故復之而不足，則吟詠以肆志、

吟詠之不足，則寄言以広意。

と、経験の多年なることを述べる如くであり、巻15の「雑詩」には、

(前略) 絃起子野，難過縣駒。流詠太素，俯讀玄虛。孰克英賢，与爾剖符。

と俗な宮仕えなどはすてて、気のあった人達との自由な暮らしの楽しさを歌いながら、琴の音と歌の調べを自負する程である。

兼好は幽玄な生き方をする嵇叔夜に傾倒するものの、時勢を直視して⁽⁷⁾衆人に對し技芸を語るときに、両手を挙げてこれに賛同することは出来なかった。

管絃に遊ぶ自然人嵇叔夜といえども、魏王朝と深い関係があるところから、晉王朝の司馬氏によって40歳で死刑に処せられたことが、兼好の脳裡をかすめたこともつだっているのではなかろうか。

以上の事を思いながら、第1段からこの段への屈折をどのように判断するかについては、第1段が高所から人間として一応持つべき教養について種々提示したのに対して、この段は、世俗人の立場に立って、その修業すべき項目を挙げたとみることでもできよう。しかしながら、時代に敏感な自由人兼好には、音をたてて移り行く時を感じとっていることは否定出来ない。

前々段の第120段で「参用の物」をのべ、また、次の第121段においても、無用をいい、逆連想として有用の道を列挙し、詩歌管絃必ずしも当世有用の道ならずとして、後の第123段に「止むことを得ずしてなすべき事おほし。そのあまりの暇幾ならず」と、世俗人の正しい生活態度の訓えをいうことからみても、文・武・医三道が必須の修業項目であり、選択項目になった詩歌管絃の道は、治世の法としては妥当性を失したという現実の状況からの発言である。すなわち、学問のための学問というようなものではなく、それは人間の品性や思慮、分別を正しく確かなものとし、傲慢、虚栄など、もろもろの背徳や迷いを浄化して社会生活の営みを円滑にする、現実的契機となり得るとするのである⁽⁸⁾。

人に勝らん事を思はば、ただ学問して、その智を人に勝らんと思ふべし。道を学ぶとならば、善に伐らず、朋に争ふべからずといふ事を知るべき故なり。大きな職をも辞し、利をも捨つるはただ学問の力なり。 (第130段)

と、「争ひて好む」ことを否定しているのは、教訓というより、真理を述べているといえよう。「よき人」とはそうした形成され磨かれた品性と、すぐれた判断の持主であり、情趣もこまやかに、また人の上に我をみる、自他一如の深い慈悲をも備えた者をいう⁽⁹⁾。

(二) 慈悲の心について

第127段の後節で、動物に対する慈悲を説き、これを人に及ぼし、殊に人の心を傷けることを戒める。

身をやぶるよりも、心を傷ましむるは、人をそこなふ事なほ甚だし。病を受くる事も、多くは心より受く。外より来る病は少し。薬をのみ汗を求むるには、験なき事あれども、一旦恥ぢ恐るる事あれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。

(第129段)

ここでは、病は心から発することを言うのであり、「薬をのみ汗を求むるには、験なき事あれども、一旦恥ぢ恐るる事あれば、必ず汗を流す」は『文選』巻27の嵇叔夜「養生論」の、

夫服薬求汗、或有弗獲。而愧情一集、渙然流離。(中略)壮士之怒赫然殊観、植髮衝冠。由此言之、精神之於形骸猶国之有君也。神躁於中而形喪於外、猶君昏於上国乱於下也。

また言う。

是以君子知形恃神以立、神須形以存。悟生理之易失。知一過之害生。

これは兼好の言う精神的な内面が、肉体的な外面に影響することを説くのに一致する。嵇叔夜はよく生を養うものは、私欲を去って名位を求めず、美味しいものは食はず、色欲によって其の心を乱さない諸条件を実行するならば、心は虚明になる。決して神仏の力によるべきものではない、と述べるのである。

薬効によらず、心による流汗とは他人の心に安らぎを持たせる思いやりであって、自然に身を置く嵇叔夜の文章と、冒題に「顔回は志人に労を施さじとなり。」

徒然草における教養美の考察 (2)

と、俗界で学徳を積む顔回の名を具体的にあげた点、慈悲心の養成の困難さと重大さを言うのである。

(6) 社交について

かかる事をして、此の世も後の世も、益あるべきわざならば、いかがはせん。此の世にはあやまち多く、財を失ひ、病をまうく。百葉の長とはいへど、よろづの病は酒よりこそ起これ。憂わするといへど、酔ひたる人ぞ、過ぎにし憂さをも思ひ出でて泣くめる。
(第175段)

本段は『徒然草』の中で長文に属す。安良岡康作氏は五段落に分けて、主題を提示⁽¹⁰⁾なさっておられる。

- (1) 他人に酒を強いて飲ませて興とすることの不可解さ。
- (2) 酒に酔っている人のいやらしさ。
- (3) 酒を飲むことの害毒の甚だしさ。
- (4) その反面に、時にある、飲酒の捨て難い面白さ。
- (5) 上戸の、朝寝から起きた姿の面白さ。

ここに引用した文は(3)にあたる箇所、『漢書』の「食貨志」にいう、

夫、塩食肴之将、酒百葉之長、嘉会之好。を引いて「百葉の長」を言った後に、陶淵明の詩で酒に「憂を忘るる物」の称を与えた「飲酒二十首」のうち、『文選』巻15「雜詩2首」の第2首目を引用する。

秋菊有佳色
裊露掇其英
汎此忘憂物
遠我遺世情
一觴雖獨進
杯尽壺自傾
日入羣動息
歸鳥趨林鳴

嘯傲東軒下

聊復得此生

日も落ちて、すべてのものの動けるものはやすみ、一日の生命を獲得したことの喜びを感じるものの、「我が世を遺てし情を遠む」は、世俗を遺てかねているといえよう。それを「憂いを忘るる物」と、酒によってはじめて浮世から遠く放ってくれる。

長々と述べてきた、酒を強いる不可解さと醜態さについて「かかる事をして、此の世も後の世も、益あるべきわざならば、いかがはせん。」と、自分を忘れ、他人に迷惑を及ぼす飲酒は有害であると述べながら、陶淵明が官位を捨てて悠々自適に酒を楽しむ姿を想うのであろう。

第 215 段は時頼の簡潔な人柄を主題にしていて、飲酒そのものについて述べたものではないので、兼好は酒または飲酒について、あまり良言していない⁽¹¹⁾。してみるならば、この段における前半の醜態は観照の描写であり、後半に入って、それもよしとする、感興的立場もある相克を兼好の中にみるのである。それは、飲酒といえば兼好が友とする一人の陶淵明を頭に浮かべたのは当然であろう。陶淵明は次の二首にうたう。「読山海經詩」に、

孟夏草木長，繞屋樹扶疎。衆鳥欣有託，吾愛吾廬。既耕亦已種，時還讀我書。窮巷隔深轍，頗迴故人車。歛言酌春酒，摘我園中蔬。微雨從車來，好風与之俱。汎覽周王伝，流觀山海図。俛仰終宇宙，不樂復何如。

あまり読まれない古書『山海經』を読む、初夏の環境と心情をのべている。旧友もたまにしか訪ねることがない。「古書」を繙くことは、山海・草木・鳥獸といった自然の中に遊びながら、手づくりの酒を楽しむのである。また、「擬古詩」に、

日暮天無雲，春風扇微和。佳人美清夜，達曙酣且歌。歌竟長難息，持此感人多。明明雲間月，灼灼葉中花。豈無一時好，不久當如何。と、美人の容貌・栄華の長続きしないことを言うが、兼好のいう第 4 節の趣興に相通ずるものがある。

この段は、3 節に陶淵明の語句を引用しながら、次の 4 節⁽¹²⁾において趣をもり

徒然草における教養美の考察 (2)

こんだとみていいのではなからうか。

注

- (1) 市古貞次編『諸説一覽 徒然草』の「成立年時」(福田秀一担当)参照。
橘説は元徳元年9月ごろから、元弘元年9月20日頃。小山説は元徳2年10月21日から翌、元弘元年9月20日までに下巻の成立とする。安良岡説は第2部を、元徳2年から元弘元年の間に執筆したという。
- (2) 黒田俊雄『日本の歴史』⑧は次のように述べている。「謀叛」とは、その当時もこんにちも、最高権力者に武力で反抗し、打倒しようとするをいう。鎌倉時代の国家秩序からいえば、事実として支配権力の最高・最重要なかなめを掌握していたのは幕府であって、いかに尊貴なる天皇といえどもそれを否定するのは秩序からはずれた一人の野望とみなさるべきであった。
- (3) 北村秀吟『つれづれ草文段抄』は『論語』の章句を引いて(以下同じ)“とあるにもとづけり。”
武田祐吉『徒然草新解』“によって思ひついて書いたものらしい。”
佐野保太郎『徒然草講義』上巻は“とあるのによって書いたものであらう。”
橘 純一『徒然草』(日本古典全書)“の項に做ったものであらう。”
富倉徳次郎『類纂評釈 徒然草』“に示唆されて書いたものである。”
安良岡康作『徒然草全注釈』上巻“を挙げているのに暗示された。”
- (4) 安良岡康作『徒然草全注釈』上巻解説による。
- (5) 第129段“葉をのみ云云”
- (6) 『国文学』「徒然草の魅力をさぐって」(昭和42年10月号)長野誉——徒然草の社会観一による。
- (7) 安良岡康作『前書』解説において、つぎのようにいう。相当な歌人であり、音楽にも嗜みの深かったと思われる彼が、芸術的教養の限界を自覚し、その政治への応用・適用の誤りを厳しく指摘している点が注目される。そして、それはまた、公家政治への批評にもなっている。
- (8) 『解釈と鑑賞』「徒然草研究入門」(昭和45年3月号)小林智昭——徒然草の主題と思想——ヒューマンイズムの思想の項による。
- (9) (8)に同じ
- (10) 安良岡康作『前書』下巻解説の項による。
- (11) 酒、または飲酒について述べている数段を拾ってみると、
声をかくして拍手とり、いたましようするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。
(第1段)
下部に酒飲まする事は、心すべきことなり。
(第87段)

徒然草における教養美の考察 (2)

友とするわろき者七つあり。(中略) 四つには酒好む人。(第117段)

片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。(中略) 酒のみ連歌して、はては、
大きなる枝、心なく折り取りぬ。(第137段)

ある者、子を法師になして、「学問して因果のことわりをもしり、説経などして世渡るたづきともせよ」といひければ、教へのままに、説経師にならんために、先づ馬に乗り習ひけり。(中略) 次に、仏事後酒などすすむる事あらんに、法師のむげに能なきは、檀家すさまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざやうやうさかひに入りければ、いよいよよくしたく覚えてたしなみけるほどに、説経習ふべきひまなくて、年よりにけり。(第188段)

第1段の酒宴での望ましい態度の外、注意または否定の弁となっている。

第215段は飲酒というより、北条時頼の質素な生活について述べているので、ここにはとらなかつた。

- ⑫ かかうとましとおもふ物なれど、おのづから捨てがたき折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心長閑に物語して、盃出したる、よろづの興を添ふるわざなり。つれづれなる日、思ひの外に友の入り来て、とり行ひたるも心慰む。なれなれしからぬあたりの御簾の中より、御くだ物、御酒など、よきやうなる気はひして、さし出されたる、いとよし。